



## インパクトファクターの正しい理解

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 茂明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/10965">http://hdl.handle.net/10466/10965</a>

## インパクトファクターの正しい理解

愛知淑徳大学文学部図書館情報学科教授 山崎 茂明

インパクトファクター（以下 IF）が掲載されている Journal Citation は、現在 2003 年版が最新である。心臓・循環器領域の代表誌である Circulation Research は、2004 年 7 月 23 日号で、同誌の 1988 年からの 2003 年までの IF 値変化図を掲載し、2003 年の IF 値が 10 を越えたことを示していた。IF 値から見た Circulation Research 誌の評価の高さを、同誌編集委員長がエディトリアル記事で取りあげたのである。JCR による IF 値の公表から、わずか 1 ヶ月後に掲載されたことを考えても、編集者の IF 値への強い関心の所在を知ることができる。世界的な総合科学雑誌であり高い IF 値を示す Nature 誌も 7 月 22 日号で、自誌の全面広告を掲載し、JCR2003 年版で 30.9 に上昇したことを告げていた。雑誌評価指標として編集者の関心のまよになっている。

今から半世紀前、Eugene Garfield 博士は、引用索引のアイデアを考え出し、そこから生まれた引用データを雑誌評価に応用することを提案した。そこで、引用回数だけでなく IF によるランキングも示し、その有効性を科学界に示した。1955 年の Science に発表された博士の論文には、科学界がいかに重要誌を識別するために、さまざまな試行を蓄積してきたかをたどりながら、当時世界の主要科学誌の引用文献データを集約することで構想された引用索引の有用性が示されていた。ビッグサイエンスを中心とした未曾有の研究・開発時代になり、「重要な学術雑誌を明らかにし」、そのデータをもとに、抄録・索引誌や文献データベースの質的な向上をはかり、いかに科学研究の情報基盤整備を達成するか、そのための雑誌評価指標として IF 値が提案されたことをはっきりと確認できる。今日、流布されている個人評価指標としての利用は、まったく考えられていない。

IF をめぐる話題が、さまざまに論じられ、個人の業績評価指標として、応用されるようになった。しかし、これは、雑誌評価を専門家の意見だけでなく、定量的に、分野を越えて比較するための指標として開発された意図から、大きく逸脱した応用である。IF の定義を理解すれば、誰でも不適切な利用として言い切れるものである。

IF について学内、研究機関、学会、政策サイドで語る人々と話した経験から、半分以上の人は、その定義を知らない。被引用数を各雑誌の出版論文数で割った値であることを理解している人はいるが、算出データを直前の 2 年間に限定していることを知っている人は少ない。さらに、出版論文数は、原著論文、レビュー、短報などの研究論文に限定しているが、被引用数は、算出のもとになる研究論文への引用に限定しているのではなく、すべての記事への引用をカウントしている事実はほとんど理解されていない。

IF の計算が最近の 2 年間の被引用数に限っていることで、最近の文献が集中的に引用されるような分野と、古い文献も長期的に引用されるような地味な分野とでは、IF 値に影響がでる。新しい文献が頻繁に引用される注目度の高い分子生物学誌や、今日的话题を提供している総合誌が、より一層優位になる。違う表現をすれば、現在の IF 値は、最近の研究の「流行」を良く反映している指標といえる。

記事の種類をめぐる検討をしてみよう。IF 値の算出にあたり、分母となる出版論文数は研究論文（原著、レビュー、短報）が中心になり、総合誌の論説記事、コレスポンドンス記事、ニュース記事などは対象に入っていない。一方、分子になる被引用数は、それらがレターや論説記事へのものか、研究論文やレビュー論文への引用かを区別することは困難である。そのため、レター記事や論説記事への引用が被引用数データから除外されているわけではない。つまり、IF の算出対象となる出版論文は、研究論文に限定されているが、被引用数は記事による区別はなされておらず、研究論文以外の記事への引用も入っているのである。そこで、重要なコミュニケーション記事が掲載され、学界のフォーラムとして機能するコレスポンドンス記事、科学界の方向性を論じるような論説記事、関心の高いニュースと解説記事、などを掲載している総合誌では、それらの記事が頻繁に引用され、結果として高い IF 値を示す大きな要因になっている。

IF の生みの親である Garfield 博士自身も、個人業績評価指標と使うべきでないと頻繁に指摘しているにもかかわらず、誤った利用法が流布されている。IF 値の特性から、生命科学研究や総合誌に有利になっており、研究資金を欲しい派手なグループと、特定の経済効果に結びつきやすいプロジェクトへ集中的に研究資金を提供したい側にとり、便利な指標になっている。地道に努力している研究者の活動を反映している指標ではない。筆者は「インパクトファクターを解き明かす」（科学技術情報協会、2004 年）を出版しており、正しい理解と利用へ注意を喚起している。

（編集者注：この寄稿は、平成 16 年度大阪府大学図書館職員研修での講演概要を講師ご自身でまとめていただいたものである）